

Ⅱ. 研究主題の設定

(1) 研究主題の見直しに向けて

川小社研では、2007年から「ともに生きる社会をめざし、ものの見方や考え方を高め合う社会科学習」を研究主題に設定し、現代社会の急速の変化の中で生きていくために、自分の考えだけではなく、相手の立場を理解することを大切にし、多様な価値観の中ですべての人々が関わり合いながら幸せに暮らせる平和な社会を目指せるよう、社会の一員としての自覚や態度の育成に取り組んできた。この思いを継承しつつ、次期学習指導要領や川崎教育プランなどで求められる子どもの姿、社会科の授業づくりなどを研究主題に取り入れ、より深く、より発展していく必要があると考え、研究主題の見直しを行うこととした。

川崎市立小学校社会科教育研究会 研究主題

ともに生きる未来を創造し、 よりよい社会の在り方を問い続ける社会科学習

ともに生きる未来を創造し (理念)

変わりゆく家庭環境、地域コミュニティ形成の困難さ、子どもの学習環境や遊びの変化、情報化社会における人間環境づくりなど、現代社会に生きる子どもたちは、今の大人たちが子どもだった頃とは違う課題と向き合いながら生活をしている。さらに、国際化のさらなる進展を求められるグローバル化、AIの急速な進化の中で人々の生活が変化する情報化社会、出生率が上がらない社会の構造の中で日本の人口の減少と高齢者の割合が増加していく少子・高齢化社会、それに伴う雇用形態の変化など、多くの課題と直面している。その中で生きる今の子どもたちが大人となり、社会の形成者として活躍する20年後、30年後に求められることは、変化の激しい時代の中で、獲得してきた知識を活用し、目の前の問題をよりよい方向へと解決しようとする態度や解決する能力であり、知識を基盤に、新しい考えを創造し、新たな答えや価値を生み出すことが必要不可欠となる。だからこそ、自分の立場や考えだけではなく、様々な人の立場になって社会的事象(ひと・もの・こと)を見つめ直し、多様な価値観、多様な文化、多様な生き方をもった人々が、みんなの幸せを願って社会を形成する一員となってほしいという願いを込めた。

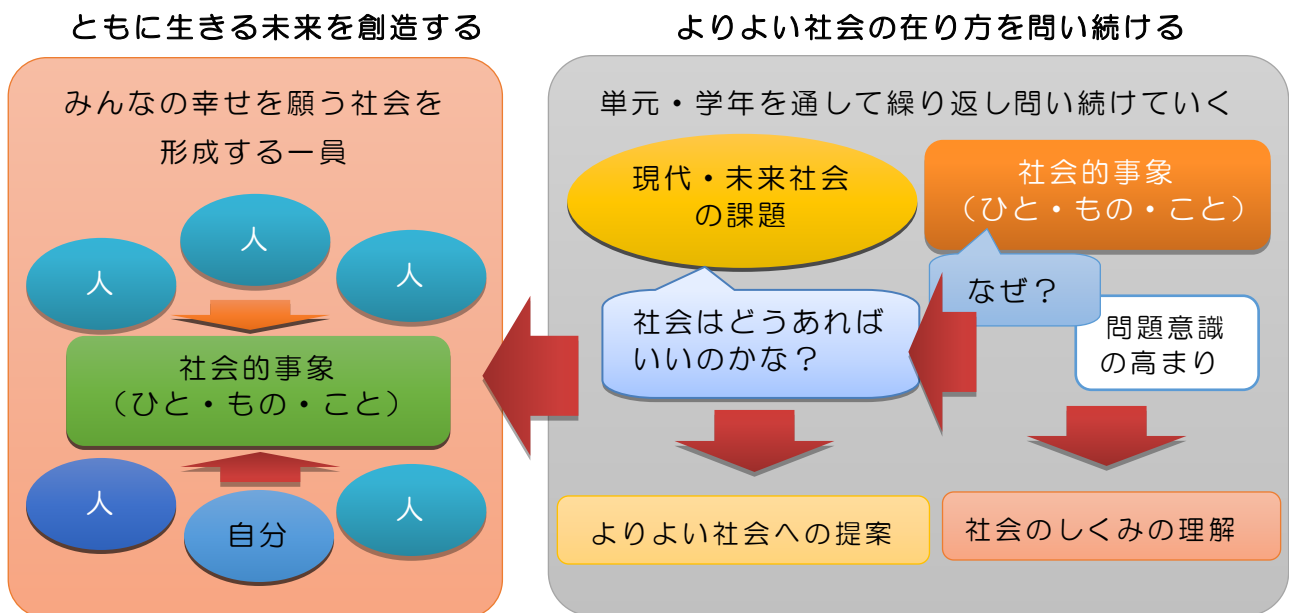
よりよい社会の在り方を問い続ける (具体の学習の姿)

そのような社会の中で、平成27年6月に公職選挙法が改正され、選挙権年齢が満20歳以上から、満18歳以上に引き下げられたことに伴い、若者が有権者としての資質・能力を身に付けるための主権者教育の推進がこれまで以上に求められるようになった。それに伴い、社会科教育においても高等学校のみならず、中学校、小学校と系統的に子どもたちを育てていく必要性がこれまで以上に高まっている。今回の指導要領においても、主権者教育を軸に公民としての資質・能力を育成するための教育改革が進められている。

これまで川小社研では、ものの見方や考え方を高め合う活動を重視してきた。自分の生活経験や既習の知識を基盤とし、事実をじっくりと見つめ、比較したり、関連付けたり、総合したりしながら考えたことを言葉で伝え合うことにより、自分の考えをより確かなものにしようと再構成し、新たな価値観や判断力、表現力を身に付けていくことを大切にしてきた。これからの社会を形成する子どもたちにおいても、社会的な見方・考え方を働かせながら、現代・未来社会の課題と向き合い「社会はどうあったらいいの？」と問い続けていくことがさらに求められていく。自分たちの地域や生活の中の当たり前のように行われていることに問題意識をもち、問題の解決を通して、社会のしくみをしっかりと理解し、課題と向き合いながらこれからの社会の在り方を考えていくことができるよう、授業改善に取り組んでいく必要がある。

(2) 5つの視点と具体的な授業像

研究主題や目指す子どもの姿にせまるために、5つの視点に沿って具体的な手立てを示しながら、社会との関わりを意識して学習問題を追究・解決する学習の充実を図り、学習過程において「主体的・対話的で深い学び」が実現するよう授業改善に取り組む必要がある。社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりするなど、見方・考え方を働かせ、調べ、考え、表現して、理解したり、学んだことを社会生活に生かそうとしたりすることで、公民としての資質・能力の基礎を育成していく。



教材化

子どもとのつながりを考慮し、学ぶ意欲を高めつつ、学習のねらいを達成することができる社会的事象の教材化を図る。

学習過程

子どもたちの実態に即した、単元や本時のねらいにせまる学習問題を設定し、一人一人がその解決の見通しをもち、社会的な見方・考え方を働かせ、自ら調べ、考えたり、選択・判断したりできるような問題解決的な学習の充実を図る。

学習活動

調べた事実について、自分の考えをまとめ、表現し、多様な言語活動を通じて再構成する中で、社会的事象の意味にせまることができるような学習活動を大切にする。

指導と評価

子どもの思考の流れを大切にし、すべての活動においてねらいに即した指導を行う。評価資料を明確にして見取り、評価に基づいた指導を行う。

一人一人が生きる社会科学習

子ども一人一人が自分の意見や考えを自由に表現しながら、お互いに高め合う集団をつくり、一人一人が生きる社会科学習を行う。

1. 教材化について

【川崎が考える社会科学習に向けて】

- ・子どもとのつながりを考慮し、学ぶ意欲を高めつつ、学習のねらいを達成することができる社会的事象の教材化を図る。
- 学習のねらいを大切にしつつ、地域にある素材を生かした教材化を進める。
- 子どもたちの実態に応じ、追究の意欲を喚起する教材化を進める。
- 社会の動向に対応した教材化を進める。
- 人々の営みを具体的に取り上げ、自らのあり方や生き方を考えることのできる教材化を図る。
- 各種副読本等を活用しながら、学習が進められるような教材化を図る。

【単元づくりにあたって】

学ぶ意欲と単元のねらいを大切に

- 社会的事象と、子どもたちとのつながりや関わりをしっかりと分析し、学ぶ意欲を高めつつ、単元のねらいを達成することができる教材化を進める。
- ・子どもの実態をとらえ、つながりを大切に教材づくりを進める。
- ・学習を進めていく中で、地域社会への理解や愛情がもてるような教材化を図る。
- ・地域に根ざした人の営みを模索していける価値ある教材を開発する。
- ・価値判断、意志決定、社会参画の基盤作りを考えられる教材化を進める。
- ・物事の本質にせまることのできるような社会的事象の教材化を図る。

【例】4年 先人たちがみんなに届けた命の水

二ヶ領用水は「川崎の育ての親」とも呼ばれ、農業用水として長い間、川崎市の発展を支えてきた用水である。実践校が用水開削の祖である小泉次大夫の拠点としたまちであることから、町名の由来や昔のまちの地図、まちなに残る堀の跡などを教材化することで、自分たちのまちが先人の活躍した舞台であり、川崎の礎をつくったという地域への誇りをもつことができた。また、堰や分量樋などの模型や二ヶ領用水の認知度についての保護者アンケートを教材化することで、実感や切実感をもって地域への誇りや愛情を涵養することができた。

これからの課題の解決につながる社会的事象の教材化

- 今後も考え続けていかなければならないような社会的事象を取り上げ、自らの在り方や生き方を考えることのできるような教材化を進める。
- ・社会の動向に対応し、今、そして未来を生きる子どもたちに必要な経験や知識を学ぶことのできるような教材化を図る。
- ・子ども自身がはたらきかけることによって、価値、必要性などを探ることができる社会的事象の教材化を図る。

- ・実際に自分たちで、事象を見たり、調べたりすることができる教材の開発を進める。
- ・体験や既習の知識を生かした学習を進められる教材化を図る。

【例】5年 情報を生かして発展する産業 ～お客様のためにより早く～

インターネットの急速な普及によって、子どもたちの生活に身近なものになっている通信販売業を教材化した。仕組みを知るだけでなく、どのような努力や工夫がなされているか考えたり、出前体験授業で実際に情報を活用している人々に会って話を聞いたりすることで、情報活用における人々の存在の大切さにも気づけるようにした。単元終末には、非常時における情報活用事例を取り上げ、情報活用の可能性や未来を見据えた社会との関わり方についても考えられるようにした。

問題意識の連続を考える

- 子どもの興味・関心の高まりや意欲の継続を促す社会的事象の教材化を進める。
- ・子どもの思考に沿った単元化をめざし、学習の継続性を図る。
- ・学ぶ必然性が生まれるような教材化を進める。
- ・子どもたちのこれまでの知識や体験と比べて、矛盾や驚きなどを与えるような教材の開発に努める。

【例】6年 今につながる室町文化

室町時代の文化の中から、現代の和室につながるものとして書院造を取り上げた。なぜ、和室が今も受け継がれているのか、その使い方や良さはどのようなところなのかについて自分たちで聞き取り調査をし、自分の生活経験も生かしながら学習が進められるような教材化を図った。

習得・活用・探究できる教材に

- 習得すべき知識・技能を明確にし、子どもたちが追究し続けることのできる教材化を図る。さらに、その習得した知識・技能を活用することで、さらなる探究活動につながるような教材化を図る。
- ・教材から学ぶべき、知識・技能を教師側がきちんととらえた上で教材化を図る。
- ・習得した知識・技能を子どもたちが活用できるような教材化を進める。
- ・各種副読本等や学校副読本などを活用する。

【例】3年 わたしたちの住む川崎市はどんなまち

～わたしたちのまちからわたしたちの市へ～

教師が、川崎市の特色をしっかりととらえた上で教材化を進めた。子どもたちは、「身近な地域の様子」の学習を生かして単元を見通す学習問題を設定したり、予想や学習計画を考えたりして、私たちのまちと似ているところや違うところなどを比較しながら、川崎市の特徴をとらえることができた。

2. 学習過程について

【川崎が考える社会科学習に向けて】

- ・子どもたちの実態に即した、単元や本時のねらいにせまる学習問題を設定し、一人一人がその解決の見通しをもち、社会的な見方・考え方を働かせ、自ら調べ、考えたり、選択・判断したりできるような問題解決的な学習の充実を図る。

□子どもの思考の流れを大切にした学習過程を重視する。

□子どもたち一人一人が自分と社会的事象とのつながりを意識し、主体的に問題を解決する学習過程を重視する。

□ねらいにせまる学習問題を子どもとともに設定し、子どもたちが問題を解決していく中で思考力・判断力・表現力等を育むことのできる学習過程を構成する。

□地域社会や我が国、世界に生きる人々の営みを大切に、単元のねらいにせまることができるとような学習過程を重視する。

【単元づくりにあたって】

問題解決的な学習

- 問題解決的な学習過程を通して子どもの学び方や問題を解決する力を育てる。
- ・単元全体を見通した問題解決的な学習過程を構成することで、子どもの意識が常に問題の解決に向かっていけるようにする。
- ・子どもの思考の流れを大切に、単元を修正しながら学習過程を構成する。
- ・子どもの問題意識が連続していくように、教師は的確な指導と評価に努める。

ねらいにせまる学習問題と学びの見通し

- 子どもたちが学習に対して見通しをもって意欲的に取り組むために、単元のねらいを明確にしたり、単元を見通す学習問題を設定したりすることで、一つ一つの活動に必要感をもたせたり、問題意識が持続できたりするような学習過程を構成する。

【例】6年 江戸幕府の政治

江戸幕府以前の武士政権の存続期間と江戸幕府の存続期間を比較し、「なぜ、江戸幕府はこんなに長く続いたのか？」という問題意識のもと、単元の学習問題を設定した。予想の場面では、前単元で学習した織田信長や豊臣秀吉の功績を想起させたり、既習を生かして考えさせたりすることで、この時代の「中心人物」や「政治」に関心が向くようにし、単元の学習計画を立てていった。

生活経験や見学・体験を考えの根拠に

- これまでの学習や、生活経験をみんなで持ち寄り、つなぎ合わせることで問題の解決を行えるような学習過程を大切にする。
- ・見学や体験活動などを単元の中で効果的に取り入れ、学級全体が共通の土台に立ち、一人一人が自分の考えの根拠をしっかりとって問題の解決に向かえるような学習過程を重視する。

【例】4年 くらしとごみ

単元のはじめに家庭でのごみ出し体験をし、ごみを身近な問題としてとらえられるようにした。その後、「ごみはどこに運ばれて、どのように処理されているのか」という子どもの問題意識をもとに見学活動をした。このように、それぞれの活動を意図的に行うことで、体験が知識と結びついて問題の解決につながった。また、共通の体験を、一人一人の考えの根拠にすることや、そこで得られた知識や経験から新たな問題を発見したり、問題の解決に知識を活用したりすることもできた。

社会的事象の見方・考え方を鍛える

- 「時期や時間」「位置や空間」「事象や人々の相互関係」などの視点から学習問題を設定し、社会的事象の様子を理解するだけでなく、比較・分類したり総合したり、国民生活と関連付けたりする方法で考えたり、選択・判断したりすることにより、社会的事象の見方・考え方を鍛えることができるような学習過程を構成する。

学びの積み重ねを意識する

- 一つの単元の中でも、小さなまとまりごとにそれまでの知識をつなぎ合わせ、学習問題に正対して総合的に問題の解決を図る学習過程を大切にする。
- 単元の終末に、単元で学んだことを生かして総合的に解決するような学習問題や自分事として切実感をもって解決を図る学習問題を設定し、単元全体を振り返るような学習過程を構成する。
- ・子どもたち一人一人が、学んできたことを生かし、学ぶ喜びや達成感を実感しつつ、社会的事象の見方・考え方を働かせて、問題を解決できる学習過程を大切にする。

【例】3年 働く人とわたしたちの暮らし ～地域とのつながりを大切にトマトを生産している人々～

本単元では「どのようにしてトマトを作っているのだろうか」という単元を見通す学習問題を見だし追究した。単元の後半では、地産地消を大切にして販売先を選んでいることについて考え、地域と自分たちとのつながりを感じることができた。このような学習過程を経ることで、地域の生産の仕事と自分たちの生活とのかかわりを考え、地域に対する愛着を育むことができた。

身近な問題（川崎らしさ）で問題解決が図れる学習過程

- 子どもの生活や調査活動の場として地域社会や地域に生きる人々と身近にかかわることで、地域の一員としての自覚と誇りをもって生きる子どもを育む学習過程を構成する。

【例】4年 むかしの人のちえがいっぱい ～400才の二ヶ領用水～

二ヶ領用水の支流であり、今も学区を流れる井田堀を単元の初めに扱うことで、子どもたちの問題意識を高めることができた。井田堀や二ヶ領用水が昔の人々の知恵や努力によってつくられ、人々によって守られてきたことを知り、自分たちの住む地域のよさを再確認することができた。

3.学習活動について

【川崎が考える社会科学習に向けて】

- ・調べた事実について、自分の考えをまとめ、表現し、多様な言語活動を通じて再構成する中で、社会的事象の特色や意味にせまることができるような学習活動を大切に
にする。その際、児童の実態やねらいに即した学習活動を設定する。

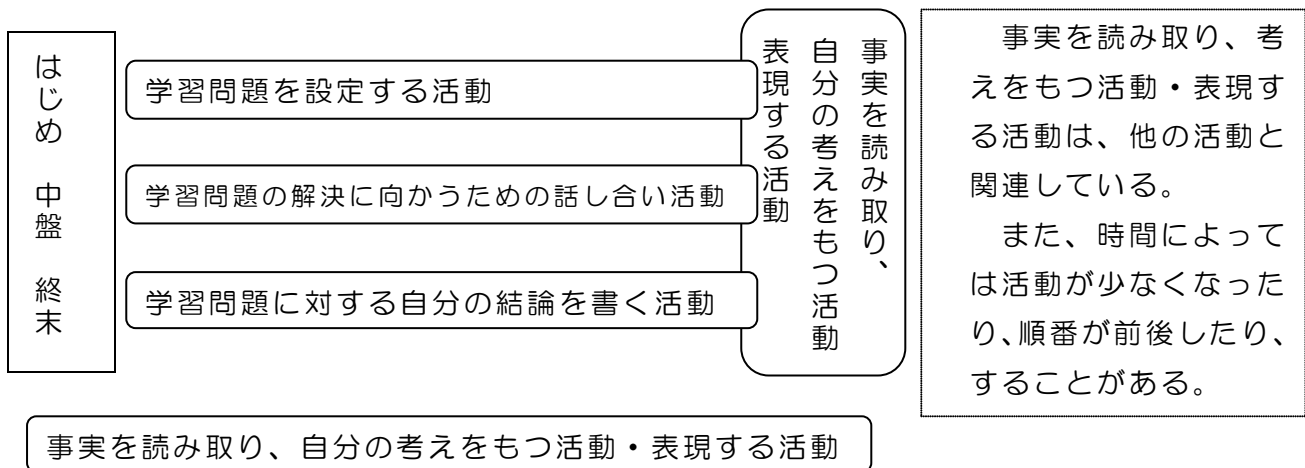
□見学・調査活動を通じて地域の人々の営みや生き方にふれ、調べたことや考えたことを表現する力を育てるような学習活動を設定する。

□一人一人の問題意識をもとに共通の土台に立って考えることのできる学習問題を設定する活動を行う。

□様々な社会的事実や友だちの考えにふれ、自分の考えと比較・関連・総合しながらそれを再構成し、自分の言葉でまとめ、伝え合うことにより、互いの考えを深めていくような言語活動を取り入れる。

【単元づくりにあたって】

◎ 1 時間の流れ中の学習活動例



○見学や体験活動は、視点やねらいを明確にして計画し、分かったことや考えたことを適切に表現する活動を大切にする。

- ・見学や調査、体験をすることで、子どもたちが社会的事象を適切に把握し、具体的、実感的にとらえられるようにする。また、それらの活動は人々の思いや願いに直接ふれ、自分の理解をより確かなものにするとともに、学習問題に対する自分の考えの根拠や、友だちの考えの変容に生かせるような、共通の土台をつくることにつながる。さらに、見学・体験活動などを通じて理解したことは、言葉に置き換えることでより定着がはかれる。

○一人一人が問題を発見・追究・解決していくために、地図や統計など、各種の資料から必要な情報を収集・選択・活用する。

- ・グラフや表、地図、想像図、新聞記事、写真などの資料を、関連付けたり比べたりして正確に読み取り、読み取ったことを自分の言葉でまとめ、問題発見や追究、問題解決につなげていく。

○事実を読みとった後、それを自分の経験や既習の知識と結びつけて解釈することによ

って、自分の考えをもち、まとめたり、説明したりできるようにする。

【例】4年 暮らしを支える水

水を守る人々の思いや努力を考えさせるために、「間伐」や「水源林」といった言葉を資料によって理解し、考えの根拠となるようにした。子どもたちは、写真で間伐の様子を知ったり、映像で水源林の働きを疑似体験したりした。その際、学習問題に対する自分の考えの根拠や、その後の話し合いの共通の土台にするために、その資料や体験の意味を理解し、それを表現する時間を十分に保障した。

学習問題を設定する活動

- 主体的に問題を解決しようとする意欲を高めるために、個々の疑問や問題意識の中から、ねらいに即した追究する価値のある学習問題を設定する。
- ・単元の導入では、社会的事象との関わりを通して気付いたり、子どもたちの経験や既習の知識がゆさぶられたりするような、社会的事象との出合わせ方を工夫し、問題意識や学習の見通しをもてるようにする。この活動が、自らの力で調べ、考え、選択・判断することにつながる。
- ・学習問題は、子どもの生活経験や既習の知識では一見解決できそうもない事実や、納得がいかないような事実、また、事象と事象の矛盾をいかして、子どもと共に設定する。時には、子どもたちの問題意識の中から教師がある程度導きながら設定することもある。学習問題は、全員が共通の土台に立って考えるために必要なものである。

学習問題の解決に向かうための話し合い活動

- 自分の主張だけでなく、異なる立場の意見も共感的に受け止め、自分の考えと比較したり、関連したり総合したりして考えを再構成する。
- ・話し合いでは、事実や事柄を整理するだけでなく、学習問題に対して根拠を明らかにしながら、自分の考えを相手に伝え、互いの見方や考え方を認め合い、集団としての考えを発展させる。
- ・他者の考えを聞くことで自分の考えに修正を加えたり、考えを対立させたり、重ね合わせたりしながら学習問題に正対した結論を導き出す。

学習問題に対する自分の結論を書く活動

- 話し合いを通じて再構成した自分の考えを、その根拠や、因果関係を明らかにしながらまとめていく。
- 単元を通じて獲得してきた社会的事象に対する情報や知識などから、自分のものの見方や考え方が変容してきた様子や、自分の考えを再構成した姿を表現する。
- ・単元の終わりには、学習を通じてわかったことを文章でまとめたり、ガイドブック、新聞、絵地図などにまとめたりする。

4. 指導と評価について

【川崎が考える社会科学学習に向けて】

- ・子どもの思考の流れを大切にし、すべての活動においてねらいに即した指導を行う。評価資料を明確にして見取り、評価に基づいた指導を行う。

□ねらいに即して「調べる」「考える」「話し合う」「表現する」などの学び方を指導する。

【指導】

□ねらいに即して、子どもの興味・関心や理解、思考の流れを把握する。

【評価】

□子どもが、自分の考えの深まりや他者の考えのよさに気付くような評価の工夫をし、子どもの考えのよさを引き出すような評価活動を行う。

【評価】

□子どもの思考の流れを大切にし、学習過程を変更したり重点化したりする。

【指導と評価の一体化】

【単元づくりにあたって】

指導

○問題解決的な学習の一連の流れを指導する。

- ・「学習問題を見いだす→予想する→調べる→調べたことから考える→考えたことを表現する→学習問題の解決を行う」というような学習の一連の流れを指導し、子どもがどのように問題を解決していけばよいか、その過程が分かるようにする。

○各種の資料から事実をしっかりと読み取れるようにする。

- ・地図や地球儀、写真・絵画資料、統計資料、年表などの資料の見方を指導し、事実をしっかりと読み取れるようにする。その際は「この資料から何を読み取るのか」というねらいを教師が明確にもち、指導を行う。

【例】グラフを見る際「何を示したグラフか」「縦軸・横軸は何を示しているか」「全体からどんな傾向が読み取れるか」「大きく変化しているところはどこか」「今後どうなっていくそうか」などを押さえることで「グラフから読み取るべきことは何か」を子どもが見い出せるように指導を行う。

【例】次時の学習問題設定のために、本時の学習の様子を見取り、子どもの理解の実態に合わせて資料を作成する。その際は子どもが問題意識をもてるよう、資料の読み取り方の指導も考えながら作成する。

○調べ方を指導する。

- ・子どもが自ら必要な資料を見つけ使いこなせるよう、資料の調べ方や地図帳の使い方等の調べ方を指導する。
- ・インタビューの仕方や電話、FAX、メール等での質問の仕方を適宜指導する。

○子どもの様々な姿を継続的・総合的に捉え、ねらいに即して指導する。

【例】学習の流れや学習問題をつかんでいるか。

社会的事象に問題意識をもち続けることができたか。追究意欲、教師の発問や支援の受け止め方はどうか。

【例】「話し合う」ための指導

友だちの意見を踏まえているか、板書の記述を生かしているか、意見をつなげて発言しているか。学習問題に即して話し合っているか。

評 価

○個々の興味・関心や理解、能力などをていねいに見取り、学習のねらいに沿うよう支援・指導を適宜行う。

○単元全体を意識して時間ごとの評価規準を設定する。その際は評価場面、評価資料、評価の観点を確認にする。

- ・単元を構想する際には、その時間で「観点別評価規準の、どの観点をよく見取ることができるか」を考える。また、評価する場面、評価対象を明確にして評価を行い、指導に生かす。

【例】学習問題に対して予想し、話し合う場面を「本時の評価」にした場合

学習問題に対して予想したことをノートに書き、そのことをもとに話し合っている様子を「思考・判断・表現」で評価する場合は、評価資料を「学習問題に対する自分の考えの記述と話し合いの様子」とし、それを指導案に明記しておく。

○「ふり返し」等を活用し教師が子どもの思考の流れを見取ったり、子どもの自己評価や相互評価を促したりする。

- ・子どもの興味・関心がどこにあるのか、どのように理解しているか、友だちの意見をどう受け止めているか等、授業後の意識や理解、変容を見取る。
- ・自分が興味・関心をもっていることは何か、何が分かって何が分からないのかなどを「ふり返し」に記述することで、自分を見つめることができるようにする。
- ・クラスみんなの「ふり返し」を一覧できるように配付したり、掲示したりすることで、友だちがどのようなことを考えているか理解したり、友だちの考えを参考にしたりすることができるようにする。

【例】「ふり返し」に書くことの指導

「◎◎さんの意見を聞いて・・・」「始めは〇〇と思ったけど、今は△△だと思う。そのわけは・・・」「～だと思う。例えば・・・」というように「書き方の指導」を行うことで、自己の変容や学習の仕方を確認することができる。また、ふり返しを紹介することで、自分（上記◎◎さん）が友だちの考えに影響を与えたことを知り、自己有用感を得ることができる。

指導と評価の一体化

○子どもの思考の流れを把握し、それを大切にした学習の展開を考える。

- ・子どもの思考の流れを大切にするすることで、子どもの追究意欲を持続させながら、学習内容の確実に理解できるようにする。
- ・授業中の姿や、学習問題の解決の場面、授業後の「ふり返し」等で子どもの思考の流れを把握し、それに沿うよう学習展開を考えるようにする。指導案通りに学習を展開することを重視するのではなく、子どもの思考の流れによっては次時の学習展開に修正を加える。

5. 一人一人が生きる社会科学習について

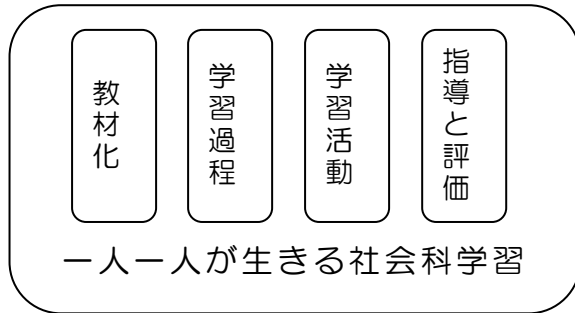
【川崎が考える社会科学習に向けて】

- ・子ども一人一人が自分の意見や考えを自由に表現しながら、お互いに高め合う集団をつくり、一人一人が生きる社会科学習を行う。

□一人一人が自分の意見や考えをもち、主体的に学ぶ力を育成する。【個の育成】

□一人一人の高まりやよさを認め合い、協働的に学ぶ集団を育成する。【集団の育成】

□個と集団の育成を相互に意識し、社会科学習で大切な力を育成する。【個と集団の育成】



「一人一人が生きる社会科学習」は、「教材化」「学習過程」「学習活動」「指導と評価」の4つをつなぎ、支える視点である。

個の育成

○一人一人の学習への意欲を高めさせる。

- ・学習の意欲を持続させ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」や「主体的に学習に取り組む態度」を確実に身に付けさせるために、子どもの思考の流れを大切にしたい問題解決的な学習の一層の充実を図る。

- ・一人一人の技能を育成するために、地図帳や地球儀の使い方、資料の見つけ方、インタビューや電話、FAX、メール等の調査の仕方、統計や年表、グラフの読み取り等の資料活用の仕方や、まとめの書き方と言った学習の基本となる学び方の指導を行う。

【例】「このグラフのタイトルや出典は何か」「資料からどのようなことが読み取れるのか」等、基本的な資料の見方を指導することで全員が同じ土台に立って授業に参加することができる。

【例】まとめを書く際にキーワードや書き出しを提示することで、分かったことや考えたことを表すことができる。また、モデルとなるまとめを紹介する等、継続的に指導を行うことも効果的である。

(これらのことは、学年や単元等を考慮して段階的に指導していく。)

○自己肯定感を高めるために細やかな支援をする。

- ・様々な学習場面での様子、まとめやふり返りの記述等から一人一人の状況を適切に見取り、子どもが成長や達成感を感じられるよう価値付けやコメントの記入等を行う。
- ・自分のよさに気づき、友だち同士でよさを認め合えるように、ノートやふり返りカード等を配付したり掲示したりする。

○自分の意見や考えを、自由に表現できるようにする。

- ・図書資料や各種資料を教室や廊下等に用意し、自ら活用できる環境を整備する。
- ・朝のスピーチや家庭での自主学習等を使って、社会科学習にかかわる日常的、継続的な活動を取り入れる。
- ・自分の意見に自信をもつために、ペアやグループで話し合う場面を設ける。
- ・一人一人の意見をあたたかく受け止めようとする雰囲気づくりを日々の学級経営の中で行う。
- ・教科を越えて、能動的に話したり聞いたりする技能を意図的、計画的に育成する。

集団の育成

○子ども同士のかかわり合いを通して、相手の立場や意見を認め、見方や考え方を働かせながら、深い学びに話し合い活動を重視する。

- ・子ども同士が共に学び合ったり教え合ったりする等、協働的に問題を解決させるために、問題解決に向けて見通したりふり返ったりする活動を行う。
- ・友だちの意見を受け止めて聞き、比較・関連しながら考えたことを話す等、話し合いをつなげたりまとめたりして発展させる。
- ・自分の考えを明確にするために、ノートやスケッチブック、ネームプレートや座席表等を活用させる。
- ・学級の中で、話し方や聞き方、まとめ方、ノートの取り方等、学習の基本となる学び方を確認し、継続的に指導する。

【例】矢印や吹き出しを使いながらノート等にまとめるように指導することで、自分や友だちの考えの共通点や相違点を明確にすることができる。

○一人一人が学習の中で生きるために、教師の役割を考え具体的な手立てを行う。

- ・子どもたちの問題意識を高めたり思考をゆさぶったりするために、資料から何を読み取らせるかだけでなく、タイミングや見せ方を考え工夫して提示する。
- ・教師が意図的に指名をするために、ノート等から子どもの思考の流れを見取り、つぶやきを拾う等して話し合いをつなげる。
- ・子どもたちが話し合いをまとめられるように、問い返しをしたり学習問題に立ち返って発言をさせる等の声掛けをしたりする。
- ・子どもの思考の流れや状況に応じて、ペアやグループで話し合う場面と全体の場で話し合う場面、それぞれのよさを生かして話し合い活動を設定する。
- ・子どもが社会的な事象の意味を考えたり価値判断をしたりするために、教師が子どもの発言を整理して板書する。